

tout de même の基本的意味について

近 藤 由 佳

0. はじめに

現代フランス語において、*même* という語は多くの機能をはたしており、使用頻度もかなり高い。また、*même* をともなった成句表現が数多く見られ、*en même temps*, *par cela même* や *tout de même*, *et / ou même*, *même si*, *quand même*, *à même*, *de même* のようにさまざまな語と結び付く。

近藤（1996）では《*même si*+Q, P》と《*quand même*+Q, P》の意味的な相違を、また近藤（1997）では *quand* と *même* それぞれの機能に注目して《*quand même*+Q, P》の基本的意味を考察したが、本稿では *tout de même* をとりあげる。この表現には「同様に」の意味を表す *de même* という句が含まれているが、*tout de même* は *tout* がつittedだけで、多くの場合「それでも、やはり」という意味を表す⁽¹⁾。これはどういうメカニズムによって起こるのかということを、我々は *tout* がいかなる機能をもち、それが *de même* という句とどのように作用し合って *tout de même* が別個の機能をもつマーカーとしてはたらくようになったかについての説明を試みる。

まず1章で *de même* と *tout de même* に関して、辞書を中心とした関連文献の記述を紹介し、2章では *tout* と *même* のはたす機能について述べる。また、3章で *tout* を含む3つの表現を用いた発話例を分析しながら、この場合の *tout* が *tout* の基本的な用法であることを論じる。そして、以上のことをもとにして、4章で *tout de même* という句がどのような構造となっているのかをまとめる。

1. 関連文献の記述

ここでは *de même* と *tout de même* それぞれについて、辞書や文法家たちの記述を簡単に紹介しておく。

1. 1. *de même*

de même は「同じように、同様にして」という意味を表し、類義語としては *de la même façon / manière, à l'avenant, semblablement, pareillement, aussi* などがある。

- (1) Il m'a parlé méchamment, je lui ai répondu *de même*. (Le Robert méthodique)
- (2) Il en va *de même* pour lui, de ses affaires. (ibid.)
- (3) Mais je devais prouver et rendre sensible la valeur des églises. *De même*, pour les laboratoires. (BARRÈS, M., *Mes Cahiers t. 14, 1922-1923*, 1923, p. 55)

これら3つの例からもわかるように、*de même* の置かれる位置はさまざまである。(1), (2) のように文末や文中に置かれた場合は前の発話で述べられた事柄を受けるが, (3) のように文頭に置かれた場合には前の発話と次の発話をつなぐコネクターの機能をはたす。

また, *ainsi que, comme* や *de la même façon / manière que* の類義語として, 「～と同様に, ～のように」の意味で《*de même que. . .*》という形で使われることもある。*que* 以下は名詞句の場合もあるし, 文の場合もある⁽²⁾。

- (4) Jean, *de même que* sa sœur, sait maintenant manger tout seul. (Le Robert méthodique)
- (5) *De même* qu'il prend soin de ses affaires, il devrait faire attention à celles des autres. (ibid.)

1. 2. tout de même

tout de même は昔は *parfaite conformité* を表し、*de même* の強調と解釈されていたが、*cependant* や *mais* といった逆接を表す語とともに用いられるようになり、現代フランス語では「それでもやはり、なんと言おうと」という対立 (*opposition*) または制限 (*restriction*) を表すようになった。*exclamatif* な文脈内で用いられることもあり、類義語としては *néanmoins*, *pour-tant*, *toutefois*, *malgré tout / cela*, *quand même* などがある。

(6) Elle ressemble autant que cela à Pierrette! Mais on voit bien *tout de même* que ce n'est pas elle. (Trésor)

(7) Il exagère, *tout de même*! (Le grand Robert)

しかし、《*tout de même que. . .*》という形で *conformité* の意味を表し、*de même* と同じ機能をはたす用法が今も残っている。

(8) Il était bon époux *tout de même* qu'il était bon employé. (COLIN, J.-P., 1993, p. 344)

2. même と tout の意味

2. 1. même

形容詞としての *même* には主に次のような2つの用法がある。

(9) Elle a la *même* robe que moi. (MOREL, M.-A., 1996, p. 29)

(10) Il est la *générosité même*. (ibid., p. 29)

(9) では「同じ」であることを表し、「彼女のドレス」と「私のドレス」の属性が一致している。(10) では「まさにそのもの」であることを表し、《*il*》が《*générosité*》である人々の集合の一員であるとされる。

また副詞としての *même* には「～さえ、～すら」という《*gradation*》, 《*renchérissement*》を表す場合と、時や場所を表す語の後ろに置かれて *exactement* のように「まさに～、ちょうど～」という意味を表す場合がある。

(11) . . . sa femme, ses enfants, ses amis *même* se sont dévoués pour

lui. (GREVISSE, M., *Le français correct*, 1973, p. 177)

(12) C'est ici *même* que je l'ai rencontré. (Le grand Robert)

(11) では「友人」が「彼のために献身した」人々の集合の一員とされるのであり、(12) では「私が彼に出会った」場所と「ここ」が一致している。

以上のことから、我々は品詞に関係なく、*même* の機能を「あるものをある共通項をもつ集合の一員としてカテゴリー化する」と1つに統合してとらえる⁽³⁾。我々は *de même* における *même* についてもこの説が有効であると考える。

(1) Il m'a parlé méchamment, je lui ai répondu *de même*.

(2) Il en va *de même* pour lui, de ses affaires. (ibid.)

(3) Mais je devais prouver et rendre sensible la valeur des églises. *De même*, pour les laboratoires. (Barrès, M., *Mes Cahiers t. 14, 1922-1923*, 1923, p. 55)

(1) は「彼は私に意地悪く話したので、私も同じように彼に答えた」、(2) は「彼についても、彼の仕事についても同じだ」、(3) は「しかし、私は教会の価値を証明し、それを人が感じ取れるようなものにするべきであった。実験室についても同じだ」と解釈される。これらの場合の *même* は (1) においては《je》の態度が《méchamment》と、(2) においては前の発話で述べられた事柄が《lui》に当てはまることを示していると考えられる。(3) においては《je devais prouver et rendre sensible la valeur》という思いが《des église》に対しても《les laboratoires》に対しても当てはまっている。また *même* の前の前置詞 *de* は起点を表す語であり、《de Paris》というような具体的な起点だけでなく、《de cinq heures》のような時間的起点や《mourir de faim》のように原因・理由を表す論理的起点をも表す。この場合は前提となる事柄が存在し、論理的な起点を表すと考えられる。(1) においては、前提となる事態《il m'a parlé méchamment》が存在し、それがもとになって《je》が《il》と同じ態度をとるという《je l'ai répondu méchamment》という事態がおこったのである。(2)、(3) においても同様の説明が成り立つ。(2) におい

ては、たとえば「他の人の人柄や仕事に対して高い評価をする」というような前提があるとする、「それをもとにして、彼についても同等の評価をする」ということを示している。(3)においては《je devais prouver et rendre sensible la valeur des églises》という前提の文がもとになって、「《les laboratoires》についても同じことをすべきであった」ということを示している。

2. 2. tout

副詞としての tout は totalement や entièrement のように「まったく、すっかり」という強調の意味を表すのが一般的であるとされているが、tout を用いて対立・譲歩を表すこともある。その場合の代表的な構文としては、《tout + ジェロンディフ》, 《tout P que Q》が挙げられる。

しかし、《tout + ジェロンディフ》には 2 通りの用法がある。

(13) *Tout en parlant de la sorte, un limier le fait partir.* (LE BIDOIS, G. & LE BIDOIS, R., *Tome 1*, 1971, p. 249)

(14) *Tout en regrettant sincèrement ses réactions violentes, il ne peut pas toujours les contrôler.* (RUQUET, M., *Comment dire?*, 1988, p. 135)

(13) では「～しながら」という、ジェロンディフで表された同時性を強調する機能をはたしているのに対し、(14) では「～であるのに」という対立・譲歩を表している。

《tout P que Q》も対立・譲歩を表す構文である。que の後の動詞は直説法の場合も接続法の場合もある⁽⁴⁾。que 以下の事柄が(15)のように確実な事実として打ち出そうとするときには直説法に置かれて「まさに～であるが」という対立を、また(16)のように事実として打ち出そうとしないときには接続法に置かれて「いかに～ても」という譲歩を表すと考えられる。

(15) *Tout français qu'il est, il est allergique au vin!* (ibid., p. 132)

(16) *Tout timide qu'il soit, il a osé protester.* (Dictionnaire du français contemporain, Larousse)

我々は一般に対立・譲歩を表すといわれる *tout* を考察することが *tout de même* の構造を知るうえで重要であると考ええる。次章ではこの用法の *tout* を含む表現の発話例を分析する。

3. 対立・譲歩を表す構文における *tout*

対立・譲歩を表す構文の中で用いられる *tout* は一見したところ、一般的な *tout* の用法から外れているように見られがちである。そこで我々はこの場合の *tout* の用法が *tout* の基本的意味の範囲内であるということを《*tout*+ジェロンドイフ》, 《*tout P que Q*》, そして《*tout de même*》の3つの表現に即して説明を試みる。

3. 1. *tout*+ジェロンドイフ

(14) *Tout en regrettant* sincèrement ses réactions violentes, il ne peut pas toujours les contrôler.

(17) *Tout en étant très riche*, il vit très simplement. (Dictionnaire du français contemporain, Larousse)

ジェロンドイフは現在分詞であるのだから同時性を表す。しかし、現在分詞が主節と従節で述べられた2つの事柄が両立していることを示すのに対して、ジェロンドイフは時、対立、条件などを表し、主節と従節で述べられた2つの事柄が同時に両立しがたいことを示す機能をもっている。(14)は「暴力的な反応を心から悔いているのに、彼はいつも抑制できるというわけではない」、(17)は「とても裕福であるのに、彼はとても質素な生活を送っている」と解釈される。発話者の頭の中には、(14)では「暴力的な反応を悔いているならば、いつも抑制できる」、また「とても裕福な人はぜいたくな生活を送っている」という一般的な考えがあるのだが、《*il*》は《*ne pas pouvoir toujours les contrôler*》, 《*vivre très simplement*》という期待に相反する行動をとっているという事実が存在しているのである。いずれの場合も主節と従節の対立は

ジェロンディフで表されていて、そこに強調の *tout* がついたのであり、*tout* 自体に対立を表す機能があるのではない。*tout* は強調を示すマーカーであると考えられる。

3. 2. *tout* P que Q

(18) *Tout français qu'il est, il est allergique au vin!*

(19) *Tout timide qu'il soit, il a osé protester.*

(18) は「彼はフランス人なのに、ワインアレルギーだ」、(19) は「いかに内気であろうと、彼はあえて抗議した」と解釈される。これらの場合の *tout* は「フランス人はワイン好きである」、「内気な人は抗議したりすることはない」という一般論に対して、《*il*》は《*être allergique au vin*》、《*avoir osé protester*》であるという対立の関係にあることを表している。このときの *tout* は《*il*》がまさに《*français*》、《*timide*》と表される属性と完全に一致する人物であることを示す機能をはたしており、やはり強調を表していると考えられる。

3. 3. *tout de même*

(6) *Elle ressemble autant que cela à Pierrette! Mais on voit bien tout de même que ce n'est pas elle. (Trésor)*

(7) *Il exagère, tout de même! (Le grand Robert)*

(6) は「彼女はそれほどにも Pierrette に似ている。しかし、それでも彼女ではないということははっきりしている」、(7) は「それにしても彼は行き過ぎだ」と解釈される。(6) の場合、*de même* によって《*on voit bien que ce n'est pas elle*》が《*elle ressemble autant que cela à Pierrette*》の帰結の中にカテゴリー化されるが、これら2つの事態は両立しがたい。発話者は「彼女はそれほどにも Pierrette に似ているから Pierrette と見分けがつきにくい」という一般的な帰結を期待しているのだが、それに反して《*on voit bien que ce n'est pas elle*》という事実が存在しているのである。つまり、*de même* のみ

で互いに相入れない関係にある Q を P にカテゴリー化するのは不可能なので、強調の tout をそえることによって P と Q の対立関係を明確にしているのである。(7) の場合、発話者と聞き手が共有している一般的常識「ふつう人はそんなことはしない」という考えに対して、「《il》はその常識をくつがえすことをした」という事実が存在する。だから、「私が《il exagère》であると判断するのはもっともだ」と、発話者が自分自身の判断について正当な理由があると主張しているのである。つまり、このときの tout de même は発話者の《il exagère》と言った発話行為を一般的常識の範囲内にカテゴリー化するマーカーとして機能する de même に強調の tout がついたものであるといえる。

4. おわりに

我々は tout の機能を中心に、tout de même の本質的意味についての説明を試みた。一見、強調の意味を表す tout の用法から外れているように見える《tout+ジェロンディフ》や《tout P que Q》における tout であるが、実際はそうではなく、基本的用法の範囲内である。

(14) *Tout en étant très riche, il vit très simplement.*

(10) *Tout français qu'il est, il est allergique au vin!*

(14) ではジェロンディフは主節と従節で述べられた 2 つの事柄の対立関係を表し、tout はそこに強調の意味をそえる機能をはたしている。(10) では tout は《il》が《français》という属性に完全に一致するというを示している。結局、いずれの場合においても tout は 強調を表すマーカーであると考えられる。tout de même における tout についても同じ説明が成り立つ。

(6) *Elle ressemble autant que cela à Pierrette! Mais on voit bien tout de même que ce n'est pas elle.*

この場合、de même によって《elle ressemble autant que cela à Pierrette》の帰結の中に《on voit bien que ce n'est pas elle》がカテゴリー化される。

しかし、これら2つの事態は両立しがたい。発話者は「彼女は Pierrette に似ているから Pierrette と見分けがつきにくい」という帰結を期待しているが、《on voit bien que ce n'est pas elle》はそれに反した事実である。だから、de même だけで対立関係にある Q を P にカテゴリー化するのは不可能なので、強調の tout をつけて2つの事態の対立関係を強調しているのである。つまり tout の基本的意味である tout de même は前提となる文で述べられた事柄と相反する関係にあることのマーカーとなるのである。

本稿では tout de même 以外の対立・譲歩を表す他の2つの表現《tout+ジェロンディフ》と《tout P que Q》について詳しく論じることができなかった。また、類似した意味をもつ quand même や malgré tout などとの比較もできなかった。これらの点に関しては今後の課題とし、稿を改めて論じることしたい。

注

- (1) tout が de même を強調すると考えて、「まったく同様に」という意味を表すこともある。
- (2) que 以下の動詞は直説法である場合もあるし、接続法である場合もある。なお、この動詞叙法選択のしかたについては本稿の論旨から外れるため、論じない。
- (3) 近藤 (1997) 参照。
- (4) 仮定的なニュアンスが加わる場合は条件法に置かれることもある。

A votre place, *tout instituteur que je serais*, j'irais quand même à la messe.

主要参考文献

- COLIN, J.-P. (1993) : *Dictionnaire des difficultés du français*, Les usuels.
 DUCROT, O. (1980) : *Dire et ne pas dire*, Hermann.
 LE BIDOIS, G. & LE BIDOIS, R. (1971) : *Syntaxe du français moderne, Tome 1*, Éditions A. et J. Picard, pp. 240-253.
 LE BIDOIS, G. & LE BIDOIS, R. (1971) : *Syntaxe du français moderne, Tome 2*, Éditions A. et J. Picard.
 MOREL, M.-A. (1996) : *La concession en français*, Ophrys.
 NØLKE, H. (1982) : *Les adverbies paradigmatiques : Fonction et analyse*, Akademisk Forlag, Université de Copenhague, pp. 51-97.

- SANDFELD, KR. (1977) : *Syntaxe du français contemporain*, Droz, pp. 370-398.
- TOGEBY, K. (1982) : *Grammaire française, Vol. 1 : Le nom*, Akademisk Forlag, Université de Copenhague, pp. 292-316.
- WÁRTBÚRG, W. et ZÚMTHÓR, P. (1989) : *Précis de syntaxe du français contemporain*, Éditions Francke Berne, pp. 320-321.
- 青井 明 (1996) : 「副詞の機能と分類について」, 『フランス語学研究』 30, 日本フランス語学会, pp. 70-76.
- 近藤由佳 (1996) : 「même si/quand même について」, 『年報・フランス研究』 30, 関西学院大学フランス学会, pp. 320-330.
- 近藤由佳 (1997) : 「quand même の基本的意味—quand と même の機能を中心に—」, 『年報・フランス研究』 31, 関西学院大学フランス学会, pp. 27-38.